

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	16th International Congress of Endocrinology and The Endocrine Society's 96th Annual Meeting and Expo(ICE/ENDO 2014)
別タイトル	16th International Congress of Endocrinology and The Endocrine Society's 96th Annual Meeting and Expo(ICE/ENDO 2014)
作成者(著者)	吉原, 彩
公開者	東邦大学医学会
発行日	2014.09
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 61(5). p.247-248.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会参加記
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohoigaku.61.247
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD75852224">https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD75852224</a>

# 16th International Congress of Endocrinology and The Endocrine Society's 96th Annual Meeting and Expo (ICE/ENDO 2014)

吉原 彩

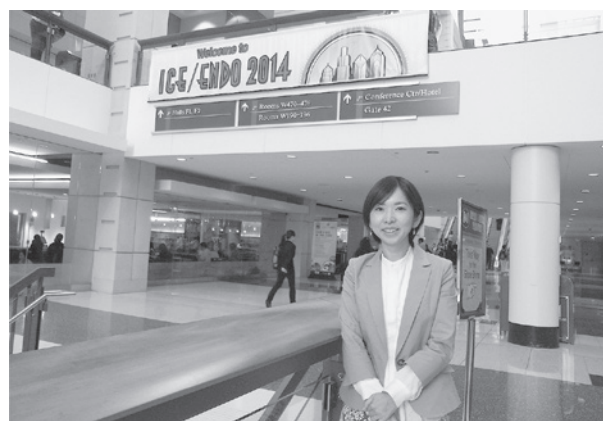
東邦大学医学部卒後臨床研修/生涯教育センター



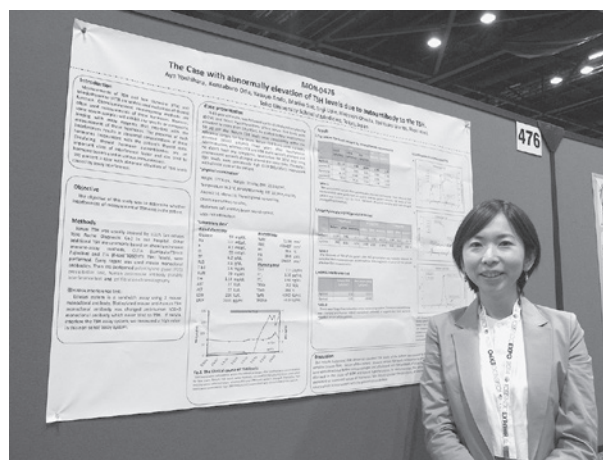
2014年6月21～24日にかけてシカゴで開催された第16回国際内分泌学会/第96回米国内分泌学会合同会議(16th International Congress of Endocrinology and The Endocrine Society's 96th Annual Meeting and Expo: ICE/ENDO 2014)に参加した。本学会は米国内分泌学会(Endocrine Society)が主催する年次集会で、毎年6～7月頃に米国で開催され、世界各国から内分泌に係わる研究者が集まり活発に意見交換が行われる。

学会では、下垂体、甲状腺、副腎、性腺、骨代謝、糖尿病、心臓血管内分泌、小児内分泌、神経内分泌腫瘍などの多岐にわたる内分泌疾患の基礎から臨床までの数多くのシンポジウムや口演発表、ポスター発表が行われた。私は甲状腺のセッションで、アミオダロンによる甲状腺炎のヨード以外の要因についての検討、抗甲状腺薬により誘発される無顆粒球症の遺伝的背景についての口演を聞いた。また、副腎のセッションでクッシング症候群の最新の薬物治療についての講義を聞くことができ、臨床に直結した基礎研究についての知見を深め、さらには疾患の診断、治療法などの確認もすることができた。

その後、私は甲状腺のセッションで、thyroid stimulating hormone (TSH) の測定に自己抗体が作用して異常値を来した症例について、ポスターセッションでの報告を行った。ポスター会場の私のポスターの前では、インド・ヨーロッパ・米国などさまざまな国の先生方が足をとめて、「どのような症例だったのか」、「検査異常が出現したきっかけはあったのか」、「免疫的な要因は何なのか」など、いろいろな質問をして下さり、良いディスカッションができた。質問者の中にシカゴ大学留学中の日本人の小児科の先生が私の症例と似ている症例の検討をしており、「病態を検討して論文にしようとしているところだ」と声をかけて下さった。



学会場入口にて



ポスター会場にて

日本語で話ができたとこともあり、病態やデータの解釈について詳細なディスカッションができ、また、海外で

活躍されている日本人の先生に刺激を受け、今後につながる有意義な時間を過ごした。

学会には、私の上司である廣井直樹先生と参加したが、大学院時代に指導をしていただいたハンセン病研究センターの鈴木幸一先生やその研究室の仲間、さらには東邦大学医療センター佐倉病院の龍野一郎教授も参加されていた。また、他にも日本から多数の先生が参加されていた。学会の合間には、龍野先生や鈴木先生と食事をする機会も得ることができた。日本ではなかなかゆっくと話す機会がなかったが、シカゴで楽しいひとときを過ごし、親交を

深めることができた。

海外の学会は、いろいろな知見を得られるだけでなく、さまざまな国の内分泌科医と話す機会も得られる場である。日本では気付かなかったことを指摘されたり、話の中から新しいアイデアを得たりと有意義な時間だった。しかし、“言葉の壁”はやはり存在し、もう少し詳しく話すことができれば良かったという後悔もある。次回はもう少しディスカッションができるように語学にも精進しようと決心しつつ、興味を持ってもらえるような研究成果を持って来年も国際学会に是非参加したいと思う。